

日本の名作名文ハイライト

# 鮎

岡本かの子

朗読 笹幸子

出所 ザ・架け橋 Story 工房

<http://the-kakehashi.jp/>

teabreak 編

## 鮎 岡本かの子

東京の下町と山の手の境い目といったような、ひどく坂や崖の多い街がある。

表通りの繁華から折れ曲って来たものには、別天地の感じを与える。つまり表通りや新道路の繁華な刺激に疲れた人々が、時々、刺激を外ずして気分を転換する為めに紛れ込むようなちよつとした街筋――

福ずしの店のあるところは、この町でも一ばん低まったところで、二階建の銅張りの店構えは、三四年前表だけを造作したもので、裏の方は崖に支えられている柱の足を根つきして古い住宅のままを使っている。

古くからある普通の鮎屋だが、商売不振で、先代の持主は看板ごと家作をともしの両親に譲って、店もだんだん行き立って来た。

新らしい福ずしの主人は、もともと東京で屈指の鮎店で腕を仕込んだ職人だけに、周囲の状況を察して、鮎の品質を上げて行くに造作もなかった。前にはほとんど出まえたが、新らしい主人になってからは、鮎盤の前や土間に腰かける客が多くなったので、始めは、主人夫婦と女の子のともよ三人きりの暮しであったが、やがて職人を入れ、子供と女中を使わないでは間に合わなくなった。

店へ来る客は十人十いろだが、全体については共通するものがあった。

後からも前からもぎりぎりに生活の現実詰め寄られている、その間をぽっと外ずして気分を転換したい。

一つ一つ我ままがきいて、ちんまりした贅沢ができて、そして、ここへ来ている間は、くだらなくばかになれる。好みの程度に自分から裸になれたり、仮装したりできる。たとえば、そこで、どんな安ちよくなことをしてもいっても、誰も軽蔑するものがない。お互いに現実から隠れんぼうをしているような者同志の一種の親しき、そして、かばい合うような懇な眼ざしで鯨をつまむ手つきや茶を呑む様子を視合ったりする。かとおもうとまたそれは人間というより木石のごとく、はたの神経とはまったく無交渉な様子で黙々といくつかの鯨をつまんで、さっさと帰って行く客もある。

鯨というものの生む甲斐々々しいまめやかな雰囲気、そこへ人がいくら耽り込んでも、擾れるようなことはない。万事が手軽くこだわらなく行き過ぎてしまう。

福ずしへ来る客の常連は、元狩猟銃器店の主人、デパート外客回り係長、歯科医師、畳屋の倅、電話のブローカー、石膏模型の技術家、児童用品の売込人、兎肉販売の勧誘員、証券商會をやったことのあるた隠居——このほかにこの町の近くの何処かに生んでいるに違いな

い劇場関係の芸人で、劇場がひまな時は、何か内職をするらしく、脂づいたような絹ものをぞろりと着て、青白い手で鮓を器用につまんで食べて行く男もある。

常連で、この界限に住んでいる暇のある連中は散髪のついでに寄って行くし、遠くからこの付近へ用足しのあるものは、その用の前後に寄る。季節によって違うが、日が長くなると午後の四時頃から灯がつく頃が一ばん落合って立て込んだ。

めいめい、好み好みの場所に席を取って、鮓種子で融通してくれるさしみや、酢のもので酒を飲むものもあるし、すぐ鮓に取りかかるものもある。

ともよの父親である鮓屋の亭主は、ときには仕事場から土間へ降りて来て、黒みがかった押鮓を盛った皿を常連のまん中のテーブルに置く。

「何だ、何だ」

好奇の顔が四方から覗き込む。

「まあ、やっのご覧、あたしの寝酒の肴さ」

亭主は客に友達のような口をきく。

「こはだにしちや味が濃いし——」

ひとつ撮んだのがいう。

「鯨かしらん」

すると、畳敷の方の柱の根に横座りにして見ていた内儀さん——と  
もよの母親——が、は は は と太り肉を揺って「みんなお  
とツつあんに「ぱい食った」と笑った。

それは塩さんまを使った押鮓で、おからを使って程よく塩と脂を抜  
いて、押鮓にしたのであった。

「おとっさん狡いぜ、ひとりでごっすりこんな旨いものを拵えて食  
うなんて——」

「へえ、さんまも、こうして食うとまるで違うね」

客たちのこんな話が——しきりがやがや渦まく。

「なにしろあたしたちは、銭のかかる贅沢はできないからね」

「おとっさん、なぜこれを、店に出さないんだ」

「冗談いっちゃ、いけない、これを出した日にや、他の鮓が蹴押さ  
れて売れなくなっちゃまわ。第一、さんまじゃ、いくらも値段がとれな  
いからね」

「おとツつあん、なかなか商売を知っている」

その他、鮓の材料を採ったあとの鱧の中落だの、鮑の腸だの、鯛の  
白子だのを巧に調理したものが、ときどき常連にだけ突出された。と  
もよはそれを見て「飽きあきする、あんなまずいもの」と顔を皺め  
た。だが、それらは常連からくれといってもなかなか出さないで、思

わぬときにひよっこり出す。亭主はこのことにかけてだけいじでむら気なのを知っているので決してねだらない。

よほど欲しいときは、娘のともよにこっそり頼む。するとともよは面倒臭そうに探し出して与える。

ともよは幼い時から、こういう男達は見なれて、その男たちを通して世の中を頃あいでこだわらない、いささか稚気のあるものに感じて来ていた。

女学校時代に、鮪屋の娘ということが、いくらか恥じられて、家の出入の際には、できるだけ友達を近ずけないことにしていた苦労のようなものがあって、孤独な感じはあったが、ある程度までの孤独感はある家の中の父母の間柄からも染みつけられていた。父と母と喧嘩をするような事はなかったが、気持ちはいよいよ独立していた。ただ生きて行くことの必要上から、事務的よりも、もう少し本能に食い込んだ協調やらいたわり方を暗黙のうちに交換して、それが反射的にまで発育しているのです。世間からは無口で比較的仲のよい夫婦にも見えた。父親は、どこか下町のビルヂングに支店を出すことに熱意を持ちながら、小鳥を飼うのを道楽にしていた。母親は、物見遊山にも行かず、着ものも買わない代りに月々の店の売上げ額から、自分だけの月がけ貯金をしていた。

両親は、娘のことについてだけは一致したものがあつた。とにかく

教育だけはしとかなくはということだった。まわりに浸々と押し寄せて来る、知識的な空気に対して、この点では両親は期せずして一致して社会への競争的なものは持っていた。

「自分は職人だったからせめて娘は」

と——だが、それから先をどうするかは、全く茫然としていた。

無邪気に育てられ、表面だけだが世事に通じ、軽快でそして孤独的なものを持っている。これがともよの性格だった。こういう娘を誰も目の敵にしたり邪魔にするものはない。ただ男に対してだけは、ずばずば応対して女の子らしい羞らいも、作為の態度もないので、一時女学校の教員の間で問題になったが、商売柄、自然、そういう女の子になったのだと判って、いつの間にか疑いは消えた。